

●中学生の部

日本動物福祉協会一等賞 新池谷 悠 (しんいけたに はるか)
「生き物の命について考える」

隠岐の島で放牧されていた牛。幼い頃、その悠悠とした姿に魅了された私は、動物園や山野に
いる動物だけでなく、家畜といわれる動物も「かわいい」と言って眺めるようになった。トラッ
クに乗せられた牛を見つけても、「牛がいる」と無邪気に喜んでいた。あの頃の私には、その牛
が牛肉になるために殺されるかもしれないという考えは一つもなかった。

数年前から再び流行が拡大している豚の感染症である豚熱。新聞で、豚熱の発生が確認された
養豚場の豚は、全て殺処分されることを知り、家畜である豚は、一つの命として扱われていない
ように感じた。家畜である牛や豚が、食肉となるために殺されること。普段これを改めて考える
ことはないが、私達はそれを受け入れて生きている。しかし、人間が生きていく上で必要な食料
として殺すことと、ただ殺処分するのでは、全く意味が違うと思った。私は、豚の殺処分を経
験された養豚農家の阿部さんと、手紙でやり取りをさせてもらっている。その中で、阿部さん
は、「殺処分は家畜を否定している」と記されていた。殺処分とは、豚が誰に食べられる訳でも
なく殺されるので、多くの豚の命が無駄になってしまう。阿部さんは、命を無駄にすることが、
辛くて苦しかったのだと思った。

しかし、阿部さんは、「殺処分された家畜を家族という生産者もいるが、それは嘘だと思う」
と言われた。なぜなら、「自分は家族は殺せない」。「殺処分された豚に守ってやれなかったと
いう悔しさはあるが、家族かと言うと違う」。私は、この言葉が家畜と向き合う阿部さんの姿勢
を表していると思った。人間は、生きていくために、家畜、魚、野菜などを生産している。
それらの命は、自分の命をつなぐためのものであり、家族のような命とは異なるということだ。
私は、飼っていたうさぎが死んだ時、泣いた。今までで一番泣いたと思うし、今までで一番悲し
かった。それはうさぎが家族だったからだと思う。

私は、命の糧としての動物を飼ったことがない。だから、家畜も大好きな動物という視点で見
てしまう。しかし、阿部さんは、家畜の命は、生活の糧とすること、命を頂くこととして受け止
めている。そして、私に「いただきます」という言葉には、作ってくれた人に感謝しながら、生
きている物の命を残さずに頂くという意味が込められていること、を教えてくれた。家畜の命と
死は、食することにつながっている。そして、食することは、私が生きることにつながってい
る。日々の食事やこの言葉を大切にしようと思った。

昨年、私は大切なうさぎを亡くしてから、生き物を飼うことが怖くなり、生き物の命について
考えることを避けていた。生き物に対する自分の気持ちを整理するために読んだのが、『生き物
と向き合う仕事』という本だ。ここに、命を飼うことは、「助からないという悲しみや辛さに耐
えること、消えていく命を最期まで見届けること」とあり、自分が動物の病気や死から逃げてい
たことに気付いた。

また、生き物の命について、ペットのような命と、家畜のような人間が管理する動物の命は分
けて考えるべき、人類の活動の前で命は平等ではない、という考えが書かれていた。家畜は、人
間に食べられるのが職業であり、感謝の気持ちを持つというのは、阿部さんと同じだと思い、こ
の考えを理解した。しかし、私は、矛盾していると思うが、命は平等であるべきだと、どうして
も思ってしまう。私は、生き物の命についてどのように考えるのが正解なのか、まだ分からない
のだと思う。

私は、豚熱の殺処分の現実を見るのが怖くて考えることを中断したり、生き物の死から目を背
けていた。阿部さんの手紙と田向さんの本により、大好きな動物と人間がより幸せになれるよう
に、生き物の命について考えることを続けていこうと思えた。